地域づくり表彰

市東地域 15 町会共創プロジェクト（千葉県市原市）

耕作放棄地や里山を活用した住民主体の地域づくり

市東地域 15 町会
共創プロジェクト

副会長

田頭　芳樹



１．地域の概要

【市原市の概要】

市原市は、千葉県のほぼ中央に位置し、都心から 50km 圏内という立地にあります。

市北部には石油化学工業をはじめとする大手企業が多数進出し、コンビナート群が形成・発展しました。

市南部には養老渓谷に代表される水と緑豊かな里山の風景が広がっているなど、里山自然と工業地帯が共存する地域です。

【市東地域の概要】

市東地域は、市原市北東部の旧市東村であった地域です。近年、周辺にニュータウンが次々とできる中、取り残されたように豊かな自然と美しい田園風景が広がっています。また、JR 誉田駅に接している地域北部は、都内や市西部の工場に通勤するために移住した人が多い地域ですが、直近 5 年間では、子ども・若者世代が約 20%減少。小学校の廃校や、耕作放棄地の急速な拡大など地域の存続が危ぶまれる状況でした。



市東地域の田園風景

２．活動開始の背景・経緯

【市原市の地域共創プロジェクト】

市原市では地域住民が主体の「対話の場」と人材育成・発掘を目的とした「地域魅力向上塾」を一体で行う地域共創プロジェクトを進めてきました。

その地域共創プロジェクトの対象地域として市原市から市東地域に働きかけがあり、2021 年度後半に住民主体の「対話の場」を開催。地域の課題や魅力、そして課題を解決するためのアイデアが話し合われました。

【ギャップを埋めた対話の場】

「対話の場」参加者には先祖代々市東地域に住んでいる方々と、近隣の工業地帯などに通勤するために移住してきた方々がいました。

当初、代々市東に住んでいる方を中心に「こんな田舎が衰退していくのは当然」といった諦めの声が多く上がっていました。一方、移住してきた方からは「豊かな自然と田園風景を未来に残したい」という声が多く、当初は両者にギャップがありました。しかし、話し合っている間に、地域への思いの共通点や、一緒にやれば出来ることは多いと気づき、ギャップは徐々に埋まっていきました。

【伝説のピザパーティー】

「対話の場」終了後に今までに出た様々なアイデアを具体的な計画にしようと、地域にある古民家の庭に夜集まり、庭に灯りをともしながら話し合いを行いました。

話し合いが終わった後、その庭にあったピザ窯を使ってみんなでピザを焼いてワイワイと食べました。それが、メンバー間の距離を大きく縮めるイベントとなり、ここから活動が本格的に始動しました。



伝説のピザパーティー

３．主な活動の内容

【自然学校】

まずは誰もが気軽に、地域の自然の実態を知り、自然に親しんでもらう場を作ろうという想いから、森に親しむ「森の教室」、自然の中での暮らしの知恵を学ぶ「暮らしの教室」を開催しています。

竹を伐採して道具を作ったり、薪割り体験をしたり、時には地域の獣害について知るきっかけとして、地域でとれたイノシシの解体ショーも開催することがあります。



自然学校「森の教室」

さらに進んで里山の管理や耕作放棄地の再生などを行うために必要な刈払機、チェーンソーといった機器の技術を学ぶ技能講習会も開催しています。技能講習会では、市東の里山や耕作放棄地で思う存分実践できます。



チェーンソーの講習

【百ねんたんぼ】

急激に増え続ける耕作放棄地を減らし、百年続く田んぼを作ろうと始めたのが「百ねんたんぼ」です。

耕作する人がいなくなった田んぼをみんなで耕作します。田植えや稲刈りといったイベントはもちろん、途中の除草などの地味な作業も含めて、毎月１回以上の作業を行っています。



百ねんたんぼの田植え風景

田んぼの作業には地域内や隣接する地域からだけでなく、遠く東京や神奈川からも参加する人がいて、市東地域の知名度向上と関係人口増加にも役立っています。

また収穫したお米は参加者に配布するだけでなく、後述する「十五や」での販売も行っています。

【地域内外の人が集まる『十五や』】

プロジェクトの活動の中で、開発した商品や特産品を売ろうという話は何度か出ていました。しかし、地域内にはスーパーも商店街もなく、販売先の確保に苦労していました。

そこで、かつて倉庫だった建物を内装や看板などすべて自分たちでリノベーションして作ったお店が「十五や」です。

まず子供達に多く来てほしいと、駄菓子をメインに、地域の人が作った手作り品や農産物を販売し、そして、不用品などを物々交換できるコーナーやプロジェクトの活動を知ってもらうための広報コーナーも設けています。



「十五や」の外観

【防災ファミリーキャンプ】

令和元年房総半島台風では市東地域も大きな被害を受け、２週間を超える停電にも見舞われました。

その時に住民が協力して倒木を伐採し、道路を開通させたり、食材を持ち寄ってしのいだりした経験から、災害発生時に一時的に自力でしのぐ力を身につけようと始めたのが防災ファミリーキャンプです。

災害時に自力でしのぐには自然学校で身につけた自然を活用する技術がとても役に立ち、災害対応面での地域力向上に役立っています。



竹飯盒での炊飯

【出前授業で閉校の危機から救え】

市東地域にあった小学校１校は生徒数の減少から残念ながら閉校となってしまいました。残る小学校１校、中学校１校も児童数・生徒数は限界に近く、廃校や統合といった話が頻繁に持ち上がっています。

学校の閉校は教育の場が失われるだけでなく、多くの卒業生を出してきた地域のアイデンティティーを失うことにもなります。

そこで、学校と連携し、地域の特性を活かした他にはない出前授業で学校の存在意義を高め、学校の存続や生徒数増加を目指しています。

出前授業では、自然学校で行っていることをベースにした竹林から伐りだした竹の工作体験、防災ファミリーキャンプで行っていることをベースにした防災教育などを行っています。



小学校での出前授業

また、隣接する地域にある帝京平成大学の看護学科においては、「地域を知る」という講義の中で、市東地域の実態やプロジェクトの活動の紹介をしています。カリキュラムの中の地域実習では、大学生がボランティアとしてプロジェクトの活動にも参加しています。

大学には地域活動を行うサークルもでき、大学生が市東地域で行うイベントを企画し、プロジェクトが支援するといった活動も行っています。

４．課題と展望

【急激に広がる耕作放棄地】

当プロジェクトでは耕作放棄地を再生し、その一部は耕作を行っていますが、担い手のいなくなった農地の増加は著しく、それら全ての耕作をプロジェクトメンバーで実施するのは困難と考えています。

そこで担い手がいなくなった農地の草刈りなどの維持管理は技能講習の受講生や私たちが実習を兼ねて行い、管理期間中は花の咲く緑肥植物を植え、景観形成にも役立てます。同時に、耕作希望者を募集。耕作希望者には、技術指導や販売先確保などの支援をしながら耕作してもらう、といった取り組みを始めました。



耕作放棄地の再生現場

【百年先の担い手をどう確保するか】

「百ねんたんぼ」は百年続く田んぼを作るというのが目標ですが、「百年」という期間で考えると、百年先までの担い手をどう確保するかは田んぼに限らず、全ての活動において重要な課題です。また、限られた人数での活動には自ずと限界があり、世代交代も必要になります。

先に述べた耕作放棄地への対応同様に、私たちが全てを担うのではなく、意欲ある人が地域で活躍しやすくなるような基盤作りを私たちが考えて実行し、意欲ある人を呼び込むことで活動が持続可能になると考えています。私たちは、「美しい自然と心豊かな人々の暮らしが百年つづきますように」を合言葉に、今後も活動を続けてまいります。